8/3　記事　途上点描⑤　中山峠小唄 7/26　湯の花小唄 7/27　駒止小唄 7/25

中山峠小唄

湯の花小唄

駒止小唄

写真は湯の花温泉

南會の神秘境を探る

途上點描 ⑤

作詞　小林金次郎

小唄集

■中山峠小唄■

峠越すのはどなたでござる
笠を持ちやれよ時雨がござる
時雨來ずとも七ケ嶽は
雲にかくれて顔さへ見せぬ
シャラン　シャラシャラ
峠は四里。

時雨來たかよ嶽よくぐれて
雨水掬んで晴れ間を待てば
嶽を呼ぶやら山時鳥——
入嶽まだかよ雨笠暗し
シャラン、シャラシャラ
峠は四里。

（七月二十六日中山峠にて）

■湯の花小唄■

あー　會津名どころ湯の花お酒
は嶽より名が高い
ナント中山峠を越して
こ宿一夜を湯の花へ
湯の花へ。

あー　嶽くは河鹿か湯の花酒か
濃に岩魚が飛び上る
ホンニ中山峠を越えて
こ宿月夜に岩魚酒
岩魚酒。

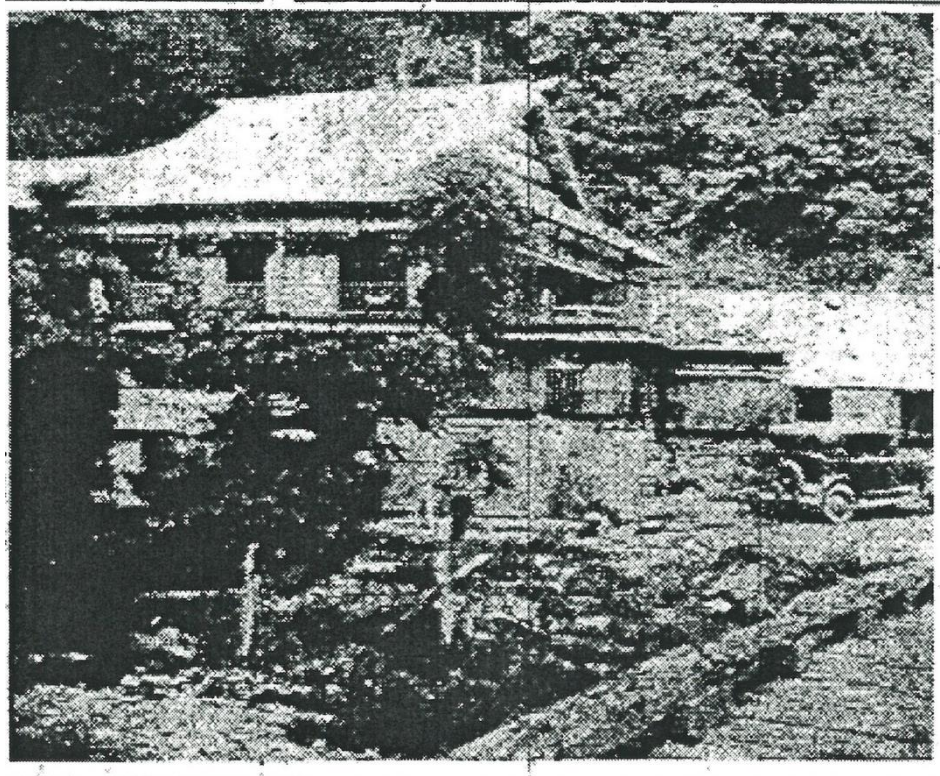
あー　冬は雪さへ湯の花明り
路は埋れて雪山ばかり
ホレサ駒止に足長々と
星を魚に雪見酒
駒止酒。

（七月二十七日湯の花温泉にて）

■駒止小唄■

よなの茂みに鳴く鶯に
宿の灯を小屋で聞へば
山口三里よ
田島に二里よ
草にかくれて笠しけば
風も涼しや谷間の霧に
又も鳴くかよホーホケキョ
又も來るかよ駒止の雨よ
駒を止めてふるさと見れば
雲にかくれて見えもせず
草につかれて笠しけば
待てど二日の月さへ見えぬ
晴れてたもれや駒止め峠。

（七月二十五日駒止峠にて）



▲寫眞は湯の花温泉

8/4　記事

第３信　7/27

途上点描⑥

湯の花より木賊へ

峠を越えて桧枝岐へ

画　木賊温泉

「木賊温泉外観」
南会津町奥会津博物館提供

南會の神秘境を探る

途上點描⑥

文　小林金次郎

湯の花より木賊へ　峠を越えて檜枝岐へ

第三信　八月二十七日

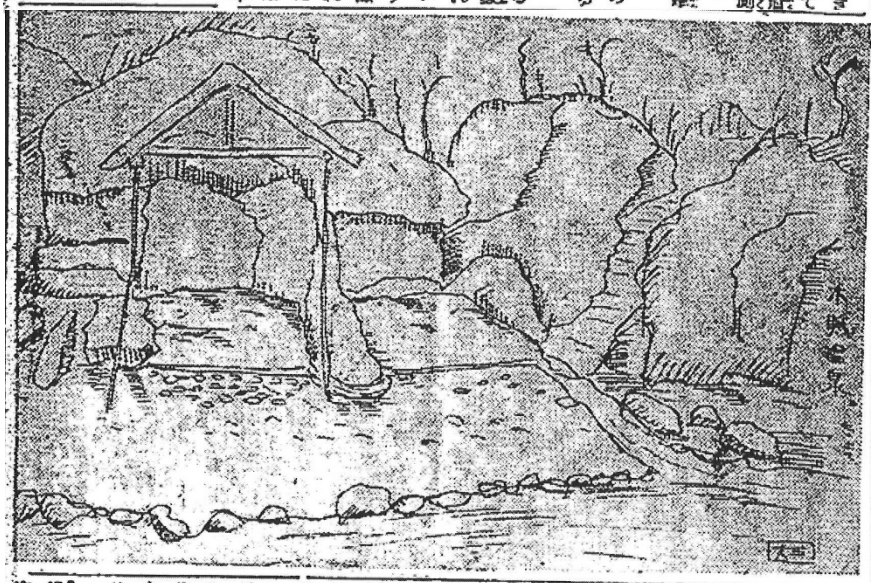
午前十時忘れ難き湯の花の温泉を後にして、鑑賞、三峠越えにかゝる村長にして湯の花温泉の經營者たる星啓三氏、元磐島民報田島支局員小寺平八氏の見送りを受けて湯の花橋のたもとにて別れを告げ、いよ〳〵先づ木賊峠にかゝる。この川の流れ頗る美しく、河

この近くの樹立にはかけすがしきりと鳴き、桑の實をとりに集つてくる。約三十五分にして頂上に達し、こゝは海拔九五〇米、この邊表の向へ側に石刻の觀音があり、木賊峠の觀音を念ずる如く、合掌して靜かに立つてゐる。

これより約一里下りて新屋敷の村、この背後に高く高倉宮を祀る室山神社がある。

人家四戸三十人位の人口であるこゝより五丁進めば道路の側の畝に十餘個の姫君墓がある。いづれも華津姫とか花見姫とが姫塚がいけられてゐる、古きは文化頃より新しき大正年間のものがある、餘り不思議なので尋ねて見るにこれは室山神社の代々の神官族を祀たものであつた同じ死ぬものならば姫といはれて永眠する乙女は仕幸だらうと。

これより程なく、木賊の温泉につくこの湯は川の中から湧いてくる風呂は粗末な小屋のなかに簡單にこしらへてあり趣味を創んだ湯い湯がボコボコと音たて湧き上



の中では河鹿がしきりと鳴いてゐる。特に一番きく、だが梅雨寒の人がこゝに入つたが最後それは二目とは見られぬ姿になるといふ。

これからいよ〳〵小峠大峠の峠越しである、この山には『まむし』がうよ〳〵してゐるし、時に熊が出ると言ふ。だが安心して欲しい。一行三人には湯の花村長の好意による若人『大内仁助』さんと木賊温泉『橋和吉』翁さんの好意による若者『橋長一郎』さんがついてゐる、それにこれは大膽ではあれぬが熊田、熊耳、の二人は何れも熊に縁があるらしいし、金太郎の弟金次郎が居ではさすがに南會津の大熊も赤熊も一寸手が出ないだらう。

案内役の二人は『まむし』取りが上手で今日も若しまむしが『ひろね』でもしてゐるなら、これを生捕りにして置り、晩の酒代にしようと思つてゐるらしい、まむしは一四十錢で賣れる。

いよ〳〵山は深くなり、ぶなやほう、紅葉、栃、の大木が鬱蒼と空を蔽ひ全く陽の光を見ない。只聞ゆるものは谷の潺音と山鳥の囀ばかり、暗なほ暗き山奥からは今にも熊や狼の遠吠がきこえて來さうである。

三時半小峠の頂上につくこゝは海拔千二百六十三米騎止、中山の峠を遂に越えてゐる。こゝより下り十町再び急坂は大峠の密林である、未だ陽の光を拜むことすら出來得ない。路々三尺餘に餘る蕨を一束四方も賣げて私たちを迎へる大羊齒大笹又名は知らねど天狗團扇の如き大葉をひろげた草凡てが私たちを抱くかの樣に待つてゐる幾千年經たとも知れぬ大木恐らく百何尺に餘るぶな、しなの大木は限りなく生え茂つてゐる。峠にて『橋長一郎』さんと別れ、いよ〳〵四道路となつて深谷を一里半下りいよ〳〵別天地檜枝岐の部落に入る。

この宿は『まる屋』といひ傳々上品な宿である。夕食の後村長『星啓三郎』氏、校長『平野友吉』氏の訪問を受く。明日はいよ〳〵仙境髮薙沼へ向ふのだ。

木賊温泉（畫）熊田　大三